

かけがえのない充足のひとつときを

# あの時代に適合する霊園散策

大正十二(一九二三年)関東大震災の直前、日本初の公園墓地として多磨霊園は開園した。四十万坪に及ぶ広大な敷地には、日本の近代史を彩った錚々たる人が眠っている。お墓を巡る楽しみから、故人やその時代を知る喜びへ――。

『東京多磨霊園物語』の著者、立元幸治さんに聞いた。

文筆家

## 立元幸治

●たちもと・こうじ 鹿児島県生まれ。九州大学卒業後、NHKに入局。退職後は九州産業大学などでメディア論や現代社会論を担当した。著書に『貝原益軒に学ぶ』(三笠書房)など。近著『東京多磨霊園物語』(明石書店)は増刷と好評。

### 思わず声をかけたくなる「再会」

多磨霊園の近くに住むようになって、散歩がてらよく歩くようになって、散歩がてらよく歩くようになって、たのですが、広いのでなかなか歩きがいがありません。ここは欧米の森林墓地を参考にして造られた国内最初の公園墓地というだけあり、武蔵野の原風景を色濃く残しながら、四季

折々の自然の風景を楽しむことができます。

多磨霊園は新宿から西に約二十キロの距離にあり、東京都の府中市と小金井市にまたがっています。面積は百二十八万平方メートルといいますが、東京ドームが二十八個も入る広大な敷地で、青山や雑司ヶ谷、谷中といった他の都立霊園と比べても最大の規模です。そこに実に五十

五万人もの魂が永遠の眠りについています。しかも政治、経済、芸能、思想、文芸といったジャンルで、日本の近現代史にその名を残す人たちも多く眠っている。

地元の自治体が主催している多磨霊園のツアーは、毎回かなりの応募があるようです。著名人の墓を巡るガイドブックも出ていますから、多磨霊園はちよつとした観光スポッ

トといえるのではないのでしょうか。たしかに緑も多いですから、いわゆるお寺にあるお墓というよりも、公園を散策するような感覚に近いのでしょうか。

近現代史に名を残した方々の墓を眺めていると、その人自身のイメージとお墓の規模や印象が重なることもあれば、逆に大きなギャップがあるような発見も多くあります。

たとえば与謝野鉄幹と晶子夫婦の墓は完全に同じ大きさの左右対称の墓が二つ並んでいます。一方、宮崎駿監督が最後の長編作品として発表して話題になった『風立ちぬ』の原作者、堀辰雄の墓は横長の白御影でシンプルなお墓に見せています。その隣には、妻・多恵のやや小ぶりの墓が寄り添うように並んでいます。二組の夫婦の墓から、それぞれの夫婦の生前の関係、姿が重なるよう

で印象に残りましたね。

『のらくろ』の作者で知られる漫画家の田河水泡の墓もあります。最初見つけたときは、のらくろをかたどった石像が墓石に添えてあったので、眠られている方はのらくろの熱心なファンだったんだろうと勝手に思い込んだのですが、墓石をよく見てみると「高見澤家墓」とあって、墓誌には「高見澤仲太郎(田河水泡)一九八九年十二月十三日没 享年九十歳」とあった。親しみのわく「のらくろ」のキャラクターが寄り添う墓は、その作者のものだったわけ、私にとっては思いがけない出会いでした。ご本人とはまったく面識がないのですが、思わず「おや、田河さんはここにいらっしやったのですか」と声をかけそうになりましたよ(笑)。

多磨霊園には、『サザエさん』の

作者、長谷川町子のお墓もあります。長谷川町子は日本の女性漫画家第一号であり、田河水泡の弟子でもあります。それで、田河水泡のお墓を見つけたときは、「そっか、ええ正門前に延びる広い通りに面したところに長谷川町子のお墓もあったな。師匠と弟子が、いま、同じ霊園に眠っているのか」と二人を結ぶ線が出てきました。

こんなふうに、散策の折々、お墓に眠る人たちのことをあれこれ調べているうちに、霊園内に眠る人と人とが、意外な縁や共通点で結びついているなあと気づいたんです。

「あっちにあるお墓のあのひと、こっちのお墓のこの人は、そっか、こういう部分でつながっているんだな。意外でおもしろいぞ」と、まるで点と点を線でつなぐように、いろいろな視点から二人の人物を探ってみる